

雲のほとりぞ

いつもの夏の日

いつものセミ

いつもの宿題

ぼつぼつ太陽が昇って山の頂きから

いつもの顔をだしてくるころだが

今日は太陽が昇るのがいつもよりおそい

そのぶん日陰は子供達の安楽の刻

飛行機の音も蚊がすすりなく音もあの頃は聞きわけた

朝 いつもの静寂の中で

八時十五分と大人達は自分の腕時計で言った

子供達は太陽の蔭で知った

ビビビ ビビ びりびりびり

山峡の日蔭から見える空に白く光るものが走った

びりびりびり ビビビ 不規則な光

光ったのは三十キロメートル先

大人達が虚ろな目で言った

突然

天が割れたと言った

太陽が落ちたと言った

天が割れて太陽が落ちて

地上も割けて

闇がやってきた

先頃この地も爆撃に会ってサイレンの音と同時に母親がいつも用意していた国債と貯金通帳の入ったポストンバッグをかかえ一目散に裏山の防空壕へ走った

八時十五分にはサイレンは聞えなかった

ビビビビビりびりびり

あお空が割けて

あお空が白くなった

泣き叫びいつものポストンバッグと防空頭巾は走りながらかぶった

いつも入る壕へ走った

壕は梁が三箇所しかなかった

背をかかめここが一番安全なところとおしえられていた

水がしたり落ちカビの臭が鼻をついた

小さな壕は不安を押しつけた

壕の闇はゆるい安息をあたえた

天の割れた光よりも太陽が落ちた光よりも

土の臭のどこか下腹部のしびれるような壕の中での安息

闇の中での束の間の安心

天が割けて大きな雲が見えた

地上を焼きつくし 地上が燃えつきて

どうしていつまでも雲がでてくるのか

どこにあの雲がひそんでいたものか

それにしても恐ろしいほど美しかった

上昇する雲の音はなかった

たち竦んで雲のゆくてをながめるしかなかった

その雲の下に兄がいたということは

父と母がさがしに行ったことで分かった

あの日 夕方まではたしかに昇っていた

ボストンバッグをかかえたただだまってながめていた

夕陽に照らされていた雲は桃色に輝いていた

ああ あれが割れた太陽の燃えかすかとも思っていた

すさまじい風が吹いて地上のすべてを空にまい上げてしまったと兄が言った

人間をことごとくまっ黒にしたとも言った

さがしに行った父と母はころがっていた人間のすがたかたちをしながら兄かそれとも他人

かと言い争っていた

兄がはいずりまわっていた雲の下は桃色ではなかったのか

割けた空の下の闇の中で兄は逃げまどっていた

無音の中で立ち昇る雲

天を割いた光

すべてを静寂の中に吸収してしまった刻の流れ

いつもの夏の日はまだ消えてしまった

秋になりふらふらになってやっと帰ってきた兄

ここから三十キロメートル先のところに鉄骨のめくれたドームがある

いつか消えた刻を求めて行ってみようと思うのだが

あの雲のほりどりとほりにくれている

いつもの夏の日

八時十五分の刻もとまる

あの夏の日はまださむざむとして汗もかかなかった